

おるすばん

おかあさんが、帰ってこられました。おもそうなふろしきづつみをおろすと、すぐだいどころの方へいかれます。

「たろうさん、よくおるすばんをしましたね、だれもきませんでしたか。」

さっそく、ゆうごはんの用意をさっるのでしょう。お米をとぐのか、いきおいよく、水道の水のながれでる音がしています。

「さっき、電とうがいしやの人が、メートルをみにきたの。」

「まあ、そう。それだけ。」

「それからね。さっき電話がね。」

たろうくんは、おかあさんをびっくりさせたくて、みけをひざからおろすと、おいそぎで、だいどころにかけつけました。

「まあ、電話が・・・」

おかさんは、まだきものもきがえないで、たすきがけです。たろうくんが、とくいになってせつめいすると、

「たろうさんも、えらくなったのね。電話にでられるようになったの、おとうさまにおみせしたかったわ。」

しみりしたちょうしで、そういわれました。せんちにいつて、とうとう帰ってこなかったおとうさんのことを、たろうくんは、よくおぼえています。

大きな手で、だっこもするように、いつもあたまをなでてくれたおとうさん、かみの毛がのびると、バリカンで、ゴリゴリかってくれたおとうさん。

おとうさん、たろうは、おかあさんをおたすけして、しっかりべんきょうします。そして、おとうさんにまけない、正しい人になります。

おとうさんがなくなれたあと、おかあさんが、どんなに苦勞をして、自分をそだてていてくださるか、たろうくんには、よくわかっています。たろうくんが元気だと、おかあさんはよろこばれます。おかあさんがよろこばれると、たろうくんはうれしくなります。

「みっちゃんは、病気だって。」

「いけないわねえ、きつとかぜよ。このごろは、よる、ずいぶんひえるから。」

たろうくんは、のどが渴いたので、お母さんから、お水をコップに1ぱい、いただきました。水道の水は、よくしょうどくしてあるので、そのままのんでも、からだをこわしません。まどのあかりにすかしてみると、うっすら青い水が、コップにガラスごしに、

きらきら光っています。ひいやりとした、おいしい水でした。